

<書評>

橘 宗吾、2016、『学術書の編集者』、慶應義塾大学出版会。  
Pp.vi+198。¥1,800+消費税。ISBN: 978-4-7664-2352-5。

来栖 正利\*

Masatoshi Kurusu

はじめに

学術書の編集に懸ける熱い思いを述べた橘(2016)を取り上げ、その要約と評者(来栖)の感想を述べるのが本稿の目的である。学術書の編集事情を直接見聞する機会を持つことが自身の研究成果の出版を行う原著者か編者に限られることを勘案すると、編集者の編集に対する姿勢や考えを知る機会は、たとえそれが編集者個人のそれらであっても、出版経験が豊富ではない研究者にとって貴重な学習機会の一つになるだろう。これは自身の研究成果(論文と著書を含む)を世に問うまでに身につけておいた方が最善な事項の数々を研究実施段階から実践できることを意味する。

橘(2016)は鈴木・高瀬(2015)とは異なる視点に基づいて編集に対する私見を論じている。後者が具体的な編集の仕方を述べ自身の考えを論じた。前者は編集の周辺事項に主たる焦点を置き、編集に対する考えを論理的に述べている。言うまでもなく、最善な研究成果を最善な学術書として刊行したいという高い職業意識をもって編集業務に従事する出版人の考えを論じていることは両者の共通認識である。編集者が意識する研究成果の社会への還元に対する価値観の一つを研究者と共有することが研究計画の思案段階から少なからず好影響を与えるものと評者(来栖)は考えている。

以上のような問題意識に基づく本稿の構成は次の通りである。まず、橘(2016)の内容を要約する。次に、評者の感想を提示し本稿を終える。なお橘(2016)に対する感想は研究教育機関に所属する研究者が担う研究教育に対する評者の考えに基づいている。それは①的確な論理的思考に基づく最善な判断を下すことができる能力を身につけ改善し続けることができる人材を社会に輩出することである。②①を実現すべく最善な教育指導を施すことである。そして③②を実現すべく研究教授能力を改善し続けることである。

## I. 本文の要約

### 1. 学術書とは何か

学問的真理の主張を世に問う手段の一つが学術書の出版である。いったん学術書が流通すれば、その需要と供給および人間社会の知識欲の需要と供給の狭間にもまれることになる。学問的真理の主張とは既存の知識の改善をそこへの同化の達成を指向した試みであり、必然的に著者、出版社、そして既存の知識に対して緊張、他方、著者および出版社と読者との間、そして読者間で摩擦、というコミュニケーションが成立する。これを健全たらしめ商業社会の発展と人間の知的水準の改善に寄与する「山人」たらんとする行為が学術書の編集という行為である（「はじめに」と序章）。

紙の書籍と電子書籍を加えた「総合書籍」の売上が横ばいに推移した過去を鑑み、出版物の市場規模の行く末を強く悲観する必要はないだろう。とはいえ、総合書籍一冊あたりの平均売上高の減少の中で新刊点数の増加という事実を見据え、今後の経営戦略を再考することが有益である。そのさい、書籍出版用の電算写植とオフセット印刷の普及を含む執筆・編集・制作過程に技術革新が大きく貢献していることを認める一方、この要因だけで当該事実を説明するには無理があるだろう。

そこで、新刊一点あたりの平均実売部数[実売総部数÷新刊点数]の減少傾向を説明する二つの要因を考えてみよう。国民全体の読書量が大きく減らないことを前提とすれば、(A) 出版社が新刊点数を増やしたので、一点あたりの平均実売部数が減った。(B) 一点あたりの平均実売部数が減少したので、出版社は新刊点数を増やした。(A) よりも (B) の方が相対的に説得力をもつ可能性が高いと思われる一方、(A) に注視して編集者の「あるべき姿」を考えよう。つまり、新刊点数を増やす出版社のあり方を丁寧に再検討してみよう。

出版の機会を増やすのではなく、書籍がもたらす利益に注目した経営戦略を出版社が選好することは、新刊一点あたりの平均実売部数の減少傾向の改善に有効である。技術革新が書籍出版に至るまでの一連の過程で発生するコストを圧縮しているという事実を踏まえ、この節約できている経営資源を出版すべき書籍を厳選する諸作業のために費やし、利益改善に貢献できる良書だけを出版するという経営戦略を出版社は選好すべきである。

もちろん、この経営戦略が新刊一点あたりの平均実売部数の減少傾向を適切に改善させるとは限らない。書籍に書かれた知識が情報財と化し、その普及が潜在需要の低下を引き起こしているという事実も新刊一点あたりの平均実売部数の減少傾向を説明する要因の一つである。これはインターネットの普及が人間の認知コストを引き上げていることを示唆する。つまり、「良いモノ」を見抜くためのコストが相対的に高くなっているのである。

上述より、良さ（価値）を認知するには時間を要する「経験財」または価値が不明であるという「信頼財」という属性を書籍が持っていることを踏まえ、編集者が理解すべきことを考えよう。

インターネットの世界を前提とした潜在的読者の行動は、ある書籍の価値がある、またはその可能性が高いと認知すれば、当該財に対する稀少価値を見出し、その認知を拡げ、そして当該書籍に対する需要を刺激する。この連鎖を喚起するために必要なことは当該書籍の認知を拡げるための「情報」を発信することとその「信頼」の改善努力を怠らないことである。この「信頼」の水準の維持強化の担い手は他ならぬ当該書籍の著者と出版社/編集者である。なぜならば、書籍がもつ稀少価値の認知が即時的な情報に還元できないからである。これを補完する役割が「信頼」に期待されている。

「総合書籍」の出版事情を共有しているものの、学術書を取り巻くコミュニケーションは変容している。したがって、これを踏まえて学術書の編集という行為の意味を考えることが最善である。橘（2016、p.15）は次のように述べている。

「自然科学分野におけるコミュニケーション手段が電子ジャーナルによる学術雑誌に移行・一般化した。これは当該学問モデルが学術全体に普及するにつれて論文概念が無差別化・一般化すると同時に、論文中心主義を全域化した。この結果、学術書が軽視されるようになった」。この現状を直視し、学術書の編集をどのように定義付け、実践していくことが学術書の軽視の改善に役立つのかということを考えなければならない。

ここで、知識が「情報」に置き換えられてしまう運命をもつと同時に身につけることができる「経験財」であることに注目したい。知識が「情報化」することで断片化されてしまう。この断片化された知識を身につけることによって、我々は当該知識のあるべき体系/全体を知りたいという知識欲を、場合によっては、志向、探究する知的探究心を内発的に生み出す。この過程において当該知識を包含する体系からの乖離、歪み、矛盾等の不完全さである「未開拓領域」を認識し、それを補完すべく研究・探究が行われ、既存の知識（体系）を漸次的かつ永続的に組み替えていく。この一連の流れを促す力の一つが「断片化された知識の、不完全さを内包する一定のまとまり」として世に問う学術書なのである。

上述の一連の流れを不断のものとするには「知識」を「作品」と定義づけることが必要である。人文学・社会科学分野の「論文」を「断片化された知識の、不完全さを内包する一定のまとまり（学術書）」に対する短めの学術書、またはそれを予期した一部分と位置づけるのである。この「作品」という概念が自然科学分野の「論文」には既に喪失か稀薄になってしまっており、それがそのまま人文学・社会科学分野の学術書に対する読者の認識も誤導・阻害しているのである。その結果、当該分野の学術書は軽視されているのである。学術書の編集とは、このような現状を踏まえて、読者の認識の「歪み」を矯正することに貢献する良書を世に問うべく行われる行為なのである（第1章）。

## 2. 編集とは何か

研究教育機関（大学）と学術出版とは取り巻く環境の進展の影響を受ける相互共振の関係にある。その道程で、継承発展させていくべき価値とその実践の意義を思案し続けることが学術書の編集の意義を洗練させることに資する。これを踏まえて編集の役割を考えるさい、①出版企画の立案（「たて」）⇒②原稿受領（「とり」）⇒③書籍刊行（「つくり」）という工程に分けてみたい。①と②はいくらかの循環、つまり、編集者と著者との間で原稿内容に関するフィードバックの繰り返しを前提とする。これは既存の知識の価値を凌駕せんとする「挑発」を志向している。

では、「挑発」とは何か？（1）編集者自身の物の見方・感じ方の自己変容を迫る「学問的真理の主張」に出会うことをゴールとして、著者の英知の結晶たる原稿の研磨を施すべく叱咤激励することである。（2）異なる研究分野を媒介し各分野の研究者の知的好奇心を喚起し、既存の知識の価値を凌駕せんとする学問的真理の創出を促すことである。（3）特定の専門分野に属する研究者に対して、既知と考えている当該分野の知見を外在的に評することである。「挑発」をキーワードに①と②をとらえ、これが編集の醍醐味であり「エディターシップ」の核心である。

研究分野とは無関連に、論文を書くという行為が同じであることを理由にそれを等価なものに見なすことは専門知の尊重を意味しない。論文に対する位置づけや書き方等に対して共有認識である「価値」と相互排他的とも言える「徳（virtue）」を専門分野の研究者は各々持っている。そうであるにも関わらず、研究機関、科学技術、そして学術行政は学問分野に対する敬意を逸するのみならず、同一視する傾向にある。この危うさを認識し、専門知の尊重と相互横断的な理解を指向する協同化が必要である。

これは現代社会の複雑多岐にわたる諸問題を理解、評価し、今後の行く末を構想する力を育むための「共通の知的基盤」および「知識のメディアーション」の構築を意味する。これはある特定の研究分野の専門知を洗練させるだけではなく隣接諸科学の英知との有機的結集を通じて、濃淡さまざな幅広の「市民にとって必要な科学技術リテラシー」を現代社会に提供することを意図する。このために必要なことは研究教育機関（大学）に所属する大学人の「知識人として層」を各人が属する専門分野だけではなく他の専門分野を包摂できる多層にし、「多種多様な専門値を分有する知識人」になることが求められる。

研究教育機関に対して早急な「解答」を求める現代社会の風潮に反して、編集者たる役割を担う者は既存の知識の価値を超越する「学問的真理の主張」を求めべく忍耐強く「挑発」し続けることである。既存の専門知の価値が脅かされることは特定の専門分野に固有の専門知ではなく、隣接諸科学を横断する専門知をつむぐことである。このような専門知は相対的に価値が高く、文系理系を横断および媒介する「市民にとって必要な科学技術リテラシー」を身につけることに役立つだろう。つまり、このような専門知の普及を指向した教科書および教養書の企画出版を通じて現代社会と共有できる可能性を高め（第1章）。

### 3. 企画とは何か

前節 a で述べた①出版企画の立案（「たて」）⇒②原稿受領（「とり」）⇒③書籍刊行（「つくり」）という工程（形式知）の前二者に焦点を絞ったケース・スタディーをノンフィクションとして記述し、マニュアル化し難い出版企画という「暗黙知」の一つをまとめてみよう。編集者は多種多様かつ複数件数の出版業務を日常業務として同時並行に進めている。そのいずれにおいても、著者と編集者との間で「組んづ解れつ」または「行きつ戻りつ」の「打ち合わせ」を、春風秋雨繰り返す「産みの苦しみ」を経験し、そしてようやく刊行の運びとなる。

出版企画は、編集者と面識のない著者の企画提案または完成原稿を持ち込む出版依頼から始まり編集者が出版企画を作り、適任者と思われる著者を探して依頼するというプロセスのいずれかの段階で生まれることが多い。これはこのプロセスのどこかで編集者の知人（著者）との会話を通じて候補になり得る人物を教えってもらう場合や要件を伝え、適任者と思われる人物の紹介を受けるといったことを含む。最終的に優れた学術書が出版できるのであればどのスタイルでも問題ない。ただし、編集者が作った出版企画にふさわしいと判断する著者に執筆依頼し出版した学術書の方が良書であった確率が相対的に高かった。

出版企画のみならず編集の「肝」は、(1) 出版企画に適任と思われる人物の業績、その執筆依頼を応諾した著者の原稿を「精読」・「熟読」することにある。そのさい、上質な内容の学術書を刊行できる資質をもった人物であることを見抜くことができる「目利き」を目指すことである。これは大学出版の編集の質を高めることが学術書の質を高めることにつながると信じるからである。(2) 執筆依頼の「候補者」を探す場合や著者との「打ち合わせ」の質を上げるために、日頃から「捨て目」を利かせて幅広く業績を濃淡様々な記憶に留めておくことが有用である。

編集することの醍醐味を「エディターシップ」にその核心があるという持論を前節の a で述べ、その具体的な内容を、出版企画を作り、それが一冊の学術書になるまでの「歴史」の概要を述べながら記述した。このノンフィクションを通じて、編集者冥利に尽きると考えている仕事を次の三つの「工程」に分けて述べてみたい。それは①出版企画を学術書として世に問うべく適任者と判断した人物が応諾してくれた時、②出版企画を託した著者から良い原稿を受領した時、そして③最善な最終原稿を受領し、それが学術書として刊行された時である（第2章）。

### 4. 審査とは何か

学術書の信頼性とは、出版社が保証するその「質」の水準のことを意味する。この維持強化のために出版社は出版企画や編集作業を通じて適切・的確な取捨選別能力の改善に努めている。この努力は高い市場価値および/または商品価値を有する良書を社会に提供し、出版社のブランド構築に貢献する。一般的に、学術書の企画・編集における「審査」をレフェリーによる「査読」と考える可能性が高いと思われる。学術書の信頼性の維持強化を果たすプロセスの一部として「審

査」があり、その一つとして「査読」がある。「査読」が万能ではあり得ないことを踏まえ、学術書の信頼性の維持強化に役立つ「懐の深い審査」を模索し続けることが有益である。

学術書出版における「審査」を「査読」を含むピアレビューだけに求めることは得策ではない。ピアレビューが、専門家が専門家のために行う「安全保障」という色彩の強い評価になる傾向があり、斬新な研究成果の公刊を排除するように働く可能性がある。加えて、研究成果の評価を社会に直接委ねるのではなく研究分野を同じくする同業者の評価が相対的に高いことを公刊によってまず示し、その理解を社会から得るといった間接評価をとる。これらの限界はピアレビューが学術書の公刊を通じて研究成果を社会に還元するという意識を稀薄にする可能性があることである。

学術書の出版の可否を最善に行うために、出版企画・編集の「審査」を巡るプロセスを次のように考えたい。①出版企画に基づいて原稿執筆者を選別するために「候補者」の業績を読むことが編集者の第一の仕事である。②出版企画の具現者になる著者の原稿に対する評価を編集者の第一次意見として準備する。他方、③著者と専門領域を同じくするピアレビューによる査読および/または隣接分野の研究者からのヒアリングという著者の相対評価を行う。④査読結果と編集者の第一次評価との突き合わせによる熟読を経て第二次意見を準備する。そして、⑤出版の可否という最終評価を編集者が行い、出版可と結論づけた原稿だけを出版社との議論を経て出版手続きを進める。

このプロセスの主たる特徴は次の二点である。(1)ピアレビューの評価にのみ出版の可否を委ねない。(2)編集者と出版社の役割を明確に区別、機能させるという、ピアレビューの「限界」を補完する相対評価の導入である。これを提唱するのは日本の学術書に関する査読制が「厳密に」または「徹底して」実施されていないという現状認識による。これは査読付き学術雑誌への投稿論文の掲載を評価判断する査読制度を、そのまま学術書の出版の可否を含む「審査」に適用しようとすることによって、当該制度が内包する未成熟な諸問題をそのまま露呈させている。

ここで、「厳密な」または「徹底した」査読制が次の三つの要素を含むと定義づける。①すべての専門書を査読対象にする、②出版の可否の判断を含む、そして③専門研究者の評価を最終的に優先する。これらを妨げている事情を(a)査読者、(b)著者、そして(c)出版社の立場に基づいて論じたい。(a)査読者の評価基準が多種多様であることに起因して、一定水準以上の質を満たす原稿の選別を阻害している。その結果、良質な学術書の出版を妨げている可能性がある。これは査読者の査読に割くことができる時間と労力、価値観、そして人間関係等という多種多様な要因に起因している。ただし、査読様式の改善や複数査読者の導入によってある程度の改善が期待できる。

(b)査読対象になることを嫌悪するか出版を急ぐ著者は査読を要しない出版を選ぶ場合があり、良質な学術書の公刊を妨げる要因になるだろう。(c)出版企画に始まって学術書の出版に至る一連のプロセスが完成原稿だけから成り立っているわけではないという日本の学術書の出版事情が

ある。出版企画を実現してくれる著者への執筆依頼等に要する「探索」コストの方が査読に要するそれを上回り、出版の可否という最終判断を出版社が改めて厳密に行うことが困難になっている。

良質な学術書の出版を継続して行うために必要なことは、出版企画を実現する著者に良質な完成原稿の執筆を支援できる「目利き」能力を編集者が持つことである。これは編集者の「読む」能力を軸にしたコミュニケーション能力を維持強化し続けることで可能になる。(A) 期待した回答を得るための的確な質問を行うことができる能力、(B) 出版企画を担う著者として推薦された「候補者」を的確に評価する能力、(C) その中から適任者を選ぶという判断する能力、そして(D) 出版企画に基づいた執筆依頼が適切にできる能力を意味する(第3章)。

## 5. 出版助成とは何か

学術書を支援する出版助成の基本的な意義は、優れた研究成果またはその萌芽成果をプロのエディターシップによって優れた学術書として世に問う機会を確実に実現することにある。これは出版社と編集者だけではなく、著者と学界、そして社会に属する諸読者が公共的価値を享受・共有するための制度である。学術書が(1) 学術的価値、(2) 社会的価値、そして(3) 歴史的価値を生み出す可能性を元来秘めており、それを編集者のエディターシップの支援と相まって着実に実現するために出版助成が存在および機能するのである。

優れた研究成果の普及を弱める要因はその出版に要する各種コストの高さ、つまり、採算の分かれ目である損益分岐点の高さにある。この引き下げを可能にする出版助成は、刊行の断念または販売価格の高さによって、優れた研究成果を社会が享受し損ねるという機会損失の最小化に資する。加えて、出版助成は学術書公刊に要したコストの早期回収にも役立ち、したがって、出版社の資金調達能力の維持強化に貢献する。これは前段で述べた学術書が内包する三つの価値をバランス良く享受できる機会を社会に提供する。

出版助成がもたらす効用は上述の三種類の価値の共有を促すコスト削減効果に留まらない。それは(A) 出版助成の申請書提出であれ最終原稿の提出であれ、著者と編集者以外の機関が設定した「締切期限」は著者と編集者を律する。(B) 出版助成のための申請書作成は研究計画の改善と内容の理解を深める機会になる。出版助成の申請書作成それ自体が研究および出版計画、そして執筆原稿を洗練させ、その結果、公刊される学術書の質の改善に役立つ。(C) 学術書の出版に要するコストを一部であれ著者が負担する場合、編集に対する編集者の利害と著者のそれとが対立する可能性を生む。これは学術書出版に要するコストを著者が私費負担するという事実が執筆原稿に対する著者の改善意欲を弱めるように機能する可能性が高くなることを意味する。

出版助成を賢明に活用することは上述の三種類の価値のさらなる改善を促す。これは学術書の信頼性および出版社のブランドの強化に役立つことを意味する。ただし、出版助成制度を設けている各種団体・機関が行う審査への過度な依存は、学術書の信頼性および/または編集者のエディ

ターシップの改善にマイナスの影響を与える可能性がある。したがって、著者および/または編集者は自らの出版企画を厳格に評価し、上述の三種類の価値を社会と共有するに値すると判断する出版企画に対して出版助成の申請を試みるべきである。

助成申請を厳選すべき理由を考えたい。それは学術書の編集者による企画と編集を幾度も経ることを通じて、当初の出版企画および執筆原稿が洗練される。この洗練された原稿が一つの「作品」に近づくにつれてその「信頼性」も同時に改善・強化される。他方、場合によっては外部団体・機関の出版助成からの助成対象に選ばれるという「外部評価」がさらにその「信頼性」の維持強化に貢献する。これらを勘案すると、研究成果を学術書として公刊することが、インターネットを通じてそれを公開することとはまったく次元が異なることを容易に理解できるだろう（第4章）。

## 6. 絶対的普遍性の確立という志

学問が普遍性を志向するものである以上、特定の学問領域に分類される研究成果を特定の言語を用いて執筆し、それを学術書という媒体を通じて公刊することは、そのこと自体がある特定の言語を理解できる読者に対して行う行為になる（「地産地消」）。ある研究成果をある特定の言語で執筆し学術書として公刊した後、その含意の普及は限定的かつ相対的に拡充する。ある特定の研究分野(学問)が内包するこの本質を踏まえた上で学術書を出版することの意義を考えてみよう。

科学の本質である「知」は絶対的な普遍性を持ち得ない。しかしながら、それに落胆せず原理的に到達し得ない絶対的普遍性を志向して学術書の公刊に取り組むべきである。特定の言語を用いて原稿執筆を行い、学術書として公刊することは特定の言語が伝える「真実」を伝えることも意味する。そのさい、その「真実」が所与の真実という全体の僅かな部分に過ぎないことを踏まえ、この存在の認識を他の言語を理解する読者に伝えることも学術書の公刊によって果たすべきである。

最善な学術書の公刊は出版企画に基づいて執筆された原稿を「一期一会」の心づもりをもって読むという「原稿第一主義」に基づいている。そのさい、「読者の目線」に加え、限られた専門家だけではなく隣接領域も含む関心を持つ読者を一人でも多く増やすことを意図した「編集者の目線」で執筆された原稿を読む。なお、ある特定の学問分野に特化した内容よりも複数の学問分野を越境していく内容の方に知的面白さを感じるものの、今までの成功体験や馴染みのある編集方法等の培った経験知に固執および踏襲する自己模倣に陥らないように注意している（第5章と付録）。

## II. 読後感

現状に満足せず、さらなる高みを志向し続ける編集者の姿勢とその実践を論じた本書から、その崇高すぎる橘氏の「有言実行」に畏敬の念を覚える一方、良い学術書をもっとたくさん公刊したいと切望している氏の悲痛な叫びみたいなものを評者は感じた。これは氏の考えに対して明確

な賛否を示す前に、もう少し氏の考えの詳細を知りたいということを意味する。評者が研究者/学者と称するカテゴリーに属していることを踏まえ、公刊された学術書が内包する価値〔(1) 学術的価値、(2) 社会的価値、そして(3) 歴史的価値〕に関する氏の考えに対する感想を述べたい。

既存の知識体系の精緻化を指向した研究成果の方が、ある知識体系の絶対的普遍性の構築に寄与する可能性が相対的に高くなる。なぜならば、人々に各種の「最善な刺激」を与える源泉が既存の知識体系であり、それが不断の研究成果によって改善され続けているからである。既存の知識体系を適切に洗練する研究成果は、改善された既存の知識体系として人々の思考の適切な「指針」の役割を果たし続けることができる。既存の知識体系の精緻化に傾注した研究成果を学術書として編集することに対する氏の考えを知りたいと思うのは評者だけではないだろう。

既存の知識体系が人々の思考の適切な「指針」であるために必要なことは、既存の知識体系の適切な洗練に貢献する研究成果を上げることができる研究能力をもつ人材を育成することである。この人材育成に必要なことの一つは既存の知識体系の変遷と諸要因を精確に学ぶことである。この学びによって研究者は次に行うべき課題を適切に設定でき、それが既存の知識体系を適切に洗練させる研究成果を上げる可能性を高くするだろう。福井(1987, pp.129-130)は次のように述べている。「文献というものは寝ころんで読んで一応理解できたような気になることがある。…単に知識を量的に増やすためならそれでもかまわないにしても、そのような勉強から貴重な示唆を得ることは少ない…。それまで出されている理論をすべて知っておかなければ、自分が新しいと思ったテーマのもとにつくり上げた理論が、…古臭い理論であった、などということにもなりかねない」。

現役研究者の継承者たる研究教育者育成に未永く役立つ学術書の公刊を評者は氏並びに大学出版社に期待したい。しかしながら、大学出版社に対する評者の期待が悲観的なままである可能性が高いだろう。これは編集者が特定分野の学術書の編集にだけ特化して従事していないという氏の記述に基づいている。さまざまな研究分野に分類される研究成果を学術書として公刊するための編集に携わっている編集者によって、特定の分野に固執する研究成果に対して斬新さ/新鮮さを感じる可能性が相対的に低いと思われる。なぜならば、目先の変った内容である方が、いわゆる重箱の隅?をつつきまくった、ただし、そうであるが故に深掘りした緻密な内容よりも目新しさ(新鮮さ)を相対的に容易に気づくことができるからである。これは具体的かつ緻密な研究成果を学術書として公刊する可能性が高くなるのが少ないことを示唆する。

加えて、特定分野の既存の知識体系の改善/改良を志向する研究教育の方を相対的に高く評価するという既存の研究教育に対する主流?の価値観に基づいている。研究者の大半がある特定分野の小さな(=具体的な)研究課題に基づいて研究活動を行い、「手堅い/緻密な」研究成果を上げるべく鋭意努力する。なぜならば、総花的、表面的、または総論的な研究成果または奇をてらっていると判断されてしまう可能性が高いそれが個人研究の業績として認められることはほとんどな

いからである。これは若手研究者の業績評価を行う際、特に顕著になる。

「既存の知識体系を理解すること」は非常に重要かつ基本である。これはある特定の研究テーマの極めて短い期間の「歴史」、つまり、大半が数年内に発表された先行研究の理解であって、一定期間の「歴史」の理解を必ずしも意味しない。例えば、各種研究助成金を得るために研究者は研究計画書を作成し、応募する。その際、研究目的の記載について、Geever (2012, p.27) は次のように述べている。「研究目的は研究計画が遂行された後に得られる重要な研究成果である。…研究目的を設定する際、それが有用であること、先行研究や今後探究されるべき課題との関係が明確であること、具体的な目的であること、検証可能であること、そして研究期間内に完了できるものでなければならない」。これはある研究活動が壮大である前に、Howlett and Bourque (2011, p.27) が言う「既存の知識体系の改善に貢献できるそれ」でなければならないことを示唆する。

### Ⅲ. むすび

学術書に関する編集者の一家言を論じた橘 (2016) を取り上げ、その内容を要約し、評者 (来栖) の感想を述べるのが本稿の目的である。既存の知識体系が多種多様な読者の思考の適切な指針であり続けるために既存の知識体系の精緻化に傾注した研究成果を学術書として世に問うべきであるという私見を橘 (2016) に対する一定の賛辞と共に述べた。これは編集者に対して学術書の評価 (値付け) に関する考えを知りたいと述べた来栖 (2017) とは異なる視点から編集者の「目利き」水準に評者が関心を持っていることを意味する。

豊かな経験知を備えた「読書家」である編集者が発する言葉が含蓄あるそれと考える評者は、多種多様な経験知を保持する人々から謙虚に学びたいと日頃より考えている。本書はかかる評者のニーズを満たす最適な著書の一つである。なお、文脈の首尾一貫性を保持するために割愛した内容がある旨の表記を氏が記載していることに評者は気づいた。一定水準の質を保持していることを前提にすれば、学術書または論文を読者が思わず手に取り、読んでしまうように仕向ける氏の卓越かつ巧妙なスキルの一端を垣間見た気がする。これは次作に対する読者の関心を引き続き持続させ、かつ購買に結びつけるために仕組んだ氏の用意周到な「編集」のなせる技なのだろう。

#### <参考文献・引用文献>

来栖正利、2017、「書評：鈴木悦也・高瀬桃子、2015、『学術書を書く』、京都大学学術出版会」、『流通科学大学論集-人間・社会・自然編』、第29巻、第2号、pp.139-146。

鈴木哲也・高瀬桃子、2015、『学術書を書く』、京都大学学術出版会。

橘 宗吾、2016、『学術書の編集者』、慶應義塾大学出版会。

福井謙一、1987、『学問の創造』、朝日文庫。

Geever, Jane C., 2012, *The Foundation Center's Guide Proposal Writing*, (6<sup>th</sup> edition), New York, N.Y.: The Foundation Center.

Howlett, Susan and Renee Bourque, 2011, *Getting Funded*, (5<sup>th</sup> edition), Seattle, W.A.: Word & Raby Publishing.